

小学校外国語活動における電子黒板を用いた読み聞かせ教材の開発研究

所属校：練馬区立八坂小学校
氏名：木村 一美
派遣先：上越教育大学大学院

キーワード：小学校外国語活動・ICT活用・電子黒板・絵本の読み聞かせ

I 研究の目的

社会が複雑化し国際化が急速に進展する中、小学校における英語教育は諸外国においても重要視されている。英語をEFLとして学ぶ近隣諸国を例にとると、平成8年にはタイで、平成9年には韓国で、それぞれ小学校英語教育が必修化されており、中国においても平成17年より必修化された。世界の主要46カ国・地域のうち現在小学校で外国語を教えていないのは、ブラジル、日本、ニュージーランド、トルコのわずか4カ国にすぎないという調査結果も報告されている。

日本においても、平成15年3月に出された『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』に集約されている通り、国際化社会に対応するために小学生のうちから異文化理解や国際感覚の基盤を養い、諸外国に遅れをとらぬよう英語教育を充実させるべきであるという考えが、今回の小学校での外国語活動必修化に大きく影響している。

これまでの経緯を振り返ってみると、平成10年に告示された現行の『小学校学習指導要領』では、第3学年以上の「総合的な学習の時間」において国際理解の一環としての外国語会話等の実施が認められ、平成14年度から実施されている。平成13年には実施に先立ち具体的な指導内容や学習指導案と教材を含む『小学校英語活動実践の手引き』が文部科学省によって作成され各学校に配布された。これにより制度として小学校での英語教育が初めて可能となった。さらに2008年3月告示の新学習指導要領では、小学校高学年において外国語活動が総合的な学習の時間から独立して、全ての公立小学校において必修として第5学年第6学年共に年間35時間実施されることとなった。平成21年度から移行措置が始まり、平成23年度完全実施される。

これまで総合的な学習の時間の中で行われてきた外国語活動は、目標や内容の設定に関しては各学校に任されており、地域間、学校間での格差がしばしば問題視されてきた。このような格差を是正するためにも、モデルとなるカリキュラムの提示や共通教材の配布を求める声が強くなり、平成20年度4月には共通教材として『英語ノート（試作版）』が外国語活動拠点校に配布

され、さらに平成21年度には全国の小学校に『英語ノート』とそれに付属した音声教材、デジタル教材が配布された。このような共通教材の使用は、全ての児童に同じ質の教育を行うという公教育の原則に近づくのに寄与するものと期待されている。

しかし、2年後に必修化を控え、移行期間としての取り組みがスタートする中、課題は山積している。「担任自身は普段英語に親しむ機会がなく、必要性もないため上達しない」「発音に自信がなく、英語に対して苦手意識がある」「外国語活動について学ぶ機会がないままのスタートに消極的な先生が多い」など、多忙な現状に加えて、外国語活動に対する負担感、不安感に関する意見が多い。また、高学年の発達段階や中学校との円滑な接続という観点から、文字導入をどうするかという課題も残る。

このように、多くの課題を抱えたままでのスタートとなったが、その課題解決の方策の一つとしてICT活用に対する期待は大きい。音声教材、デジタル教材等のICT教材を用いることにより同じモデルの掲示が可能となり、小学校外国語活動の標準化が確保されるのではないかと考えられる。つまり、ICTの有効活用は、教員の指導経験の有無に関わらず、誰でも同質の授業を実践することができるという可能性をもつ。また、ICTを用いることにより活動内容の幅が広がり、高学年の興味・関心に沿った授業を展開することも期待できる。

そこで、本研究では、小学校外国語活動の現状と課題をふまえた上で、ICT活用の可能性を探る。特に、絵本をデジタル化したものを電子黒板で読み聞かせた場合、どのような効果が見られるかを検討する。絵本は、低学年で用いられることが多く、先行研究も幼稚園から低学年にかけての幼い子ども達を対象にしたものがほとんどであるが、絵本の選定や取り入れ方により高学年の興味・関心に合った教材として十分活用できるものと考えられる。さらに、意味・音声と文字を自然に結びつけることができる絵本は文字に興味をもち始めた高学年に適した教材であり、電子黒板を用いた読み聞かせ教材の開発は研究すべき課題の一つであ

ると考えられる。

II 研究の方法

1 検証授業

東京都公立小学校5年生2学級40名を対象に、2010年6月に45分間検証授業を各3回行った。授業の題材と使用絵本は以下の通りである。

- ① 第1時「クイズ大会をしよう What's this?」
絵本「Round like a ball」
- ② 第2時「外来語を知ろう What do you want?」
絵本「Dinner is ready.」
- ③ 第3時「将来の夢 What do you want to be?」
絵本「What can a hippopotamus be?」

2 測定具

測定具として以下のアンケート形式の質問紙3種類を用いた。

- ① 児童対象のフェイス・シートを含む事前アンケート (全13項目)
- ② 児童対象の事後アンケート (全33項目)
- ③ 児童用授業ふりかえりシート
(全6項目と自由記述2項目)

以上の測定具は次の観点から成り立っている。

- ① 英語や外国への興味・関心に関する意識の変容
- ② ARCS動機づけモデルに基づく評価
- ③ 各活動内容に対する児童の意識・態度
- ④ 電子黒板を用いた読み聞かせ教材に対する児童の意識
- ⑤ 児童の各授業への評価得点及び自由記述

各質問紙から得られたデータを直接確率計算、分散分析及び χ^2 検定を用いて分析した。

III 研究の結果

1 英語や外国への興味・関心に関する意識の変容

「英語を勉強するのは楽しみ」「多くの人と英語を話してみたい」「英語はおもしろい」の3項目において事前と事後を比較した結果、1%水準で有意に意識が向上した。他の項目においては有意差はみられなかったが、平均は高い点で推移していた。このことから、本研究の学習を通して、児童の英語や外国への興味・関心は向上あるいは維持されたことが明らかになった。

2 ARCS動機づけモデルに基づく評価

全ての項目において、肯定的回答をした児童が1%水準で有意に多く、本研究の学習は児童の動機づけを高めるものであることが明らかになった。各項目間で有意に高かったのは、「おもしろかった」「わくわくし

た」、「やりがいがあった」、「満足した」、「もっとやりたい」の5項目であった。

3 各活動内容に対する児童の意識・態度

全ての項目において高い平均がみられ、肯定的回答が1%水準で有意に多かった。このことから、児童が各活動内容を好意的に捉えていることが明らかになった。各項目間で有意に高かった項目は「電子黒板を使った3ヒントクイズ」であった。

4 電子黒板を用いた読み聞かせ教材に対する児童の意識

全ての項目において高い平均がみられ、肯定的回答が1%水準で有意に多かった。このことから、電子黒板を用いた物語の読み聞かせは高学年の児童にとって興味深いものであり、話の筋を理解するのに絵や文字が有効であることが明らかになった。項目間で有意に高かった項目は「絵があると物語の筋がわかりやすい」であった。

5 児童対象の各授業評価得点

全ての項目において高い平均がみられ、肯定的回答が1%水準で有意に多かった。このことから、児童は授業後の振り返りシートにおいて高い自己評価をしたことが分かった。項目間の比較では、第1時と第2時において「授業が楽しかった」が有意に高かった。3回の授業間の比較では、「はじめて知ったことがあった」「話をよく聞いた」の2項目において、第3時が有意に高かった。

IV 考察

本研究を通して、電子黒板を用いた読み聞かせ教材は高学年児童の興味・関心を高め、今後の外国語活動の充実に貢献するものであることが示唆された。

電子黒板上で映す絵本は、単語や文を簡単なものにして授業の目当てに合うよう換えたりでき、文字に興味をもち始めた高学年に適した教材である。また、絵本を通して文字に親しんでおくことで、中学校で新たに始まる文字学習への抵抗感を軽減しスムーズな移行が可能になると思われる。

今後、電子黒板を使用せずに同じ活動案で授業を行った場合どのような結果になるかについて、比較実験授業を行う予定である。電子黒板や物語教材の効果的な取り入れ方についてさらに研究を深めることは意義のあることだと考えられる。